

空虚な空間をめぐって

—デカルトとロック—

平松希伊子

—ロンドンに到着するフランス人は、他の諸事万端と同様、哲学においても勝手が分ちがっていることに気がつく。彼は充実した世界を去って、今やそれが空虚であると見出す。—（ヴォルテール「哲学書欄」より）⁽¹⁾

*

デカルトがその自然学において、物体を単なる延長へと還元し、空虚な空間（＝真空）の存在を容認しなかったことは、もはや有名を通り越した悪名高い話であろう。通常の科学史において、彼の充実空間と渦動説は、ニュートンの輝かしい業績の引き立て役として登場させられるのが常である。確かに、空虚の否定はデカルト自然学にとって幸福な結果をもたらしたとは言えないだろう。なぜなら、デカルトは折角ガリレイをも捕えていた円運動の呪縛から脱し、直線上の慣性法則を定式化しながら、充実空間という大前提ゆえに、実際の運動としては円環運動しか認めえず、また、運動量保存則にもとづいて衝突運動を計算してみせるものの、次のように言わねばならぬのだから。「しかし、世界のうちには、他のすべての物体からそのように切り離された物体はありえないし、われわれの周囲にある物体はどれも、完全な固体でないのが普通であるから、各物体の運動が他の物体との衝突によってどれだけ変化するかを確定するための計算をするのは、実際はもっと困難なはずである」⁽²⁾と。かくて、デカルトは当時一級の数学的才能を有しながら、自身の自然学においてほとんどそれを生かすことができないという皮肉な結果を生ずる。宝の持ち腐れの感がするといえば、言いすぎであろうか。しかしながら、このような否定的評価は、われわれが時の審判を知る後世の人間であるからこそ、いわば高みに立って下しうるものである。私はこの小論において、そのように断罪する態度を極力排し、できる限りデカルトの体系に即しつつ、彼がなぜ空虚を否定せざるをえなかったかを考えてみようと思う。また併せて、空虚な空間を擁護したロックのデカルト批判を紹介し、「合理論」と「経験論」という両者の哲学の根本的相違が、真空存在の是非にまで及んでいることを示したいと思う。

1. 空虚の否定と「実体＝属性」シュマ

有名な「学問の木」の比喩にあるように、デカルトにおいて自然学は形而上学という根から生じた幹である。従って、空間と物体とを同一視し、空虚な空間を排除する自然学の原理的主張には、形而上学の裏づけがあるはずである。この空虚否定の根拠を問うことが本小論の主要な目的となる。

さて、デカルトの主張は、単に現実空虚な空間が存在しないということにとどまらない。空虚な空間とは論理的な矛盾であり、従って不可能なのである。

「ところで、哲学上の意味に解された空虚、すなわちその中にまったくなんらの実体もない空間、というものが存在しえないということは、空間の延長、すなわち内的場所⁽³⁾の延長が、物体の延長と異なる

るものでないということから、明白である。すなわち、物体が長さ・幅・深さにおける延長を有するものであるということだけから、物体が実体であるということ、われわれは正しく結論するのであるから一無がなんらかの延長をもつというのはまったく矛盾しているからである一、空虚と想定されている空間についても、同じように結論しなければならない、その空間に延長がある以上、そこには必然的に実体もなければならない、と。」（Pr. II. 16）⁽⁴⁾

この論証の骨子は、〈無は属性をもたぬ→延長は一つの属性である→延長のあるところには必ずそれを支える実体がなければならぬ〉というものである⁽⁵⁾。その背後には、あらゆるものを「実体」（＝自存者）と「属性」（＝依存者）とに二分してしまおうとするデカルトの過激な姿勢が見て取れよう。私は、このようなものの捉え方を「実体＝属性」シエマと呼ぼうと思う。それは、存在するものは窮極的には実体に他ならず、それ以外のもの（性質、状態等）はすべて、何らかの実体に帰属する属性である、とする考え方である。上記のデカルトの論証が、なにがしかの説得力をもつとすれば、それはこのようなもの見方が、われわれのうちにいかに深く根付いているかを証するものであろう。ともあれ、通常われわれは、空間や時間を、このような実体か属性かというシエマの下では考えない。デカルトの同時代人で真空実験を行ったパスカルも、空間に実体でも属性でもない独自の存在論的位置を与えている⁽⁶⁾。しかしながら、ひとたびデカルトとともに、空間に対してこのシエマを発動させてしまえば、「空虚な空間」とは、「無がなんらかの属性をもつ」あるいは、「そこに或る性質が存在するにもかかわらず、その性質を支える基体が存在しない」というシエマに対立する矛盾概念以外の何ものでもないことは、容易に理解できよう。デカルトの好んだ比喻を借りれば、それは山を谷なしに考えるようなものである⁽⁷⁾。

この空虚否定の論拠となった「実体＝属性」シエマをデカルトが不可疑な真理とみなしていたことは、次の引用から明らかであろう。「次のことは、自然の光によってきわめて明らかである。すなわち、無にはいかなる状態 *affectiones* もいかなる性質もないということ、したがって、なんらかの状態や性質が認められるところでは、それらの属する事物、すなわち実体が必ず見いだされるのであり、また、われわれがこの事物すなわち実体のなかに、状態や性質を認めることが多ければ多いほど、ますます明晰に、その実体を認めるのだということ。」（Pr. I. 11）

デカルトは、このシエマを共通概念あるいは公理と呼び、永遠真理の中に数え入れている⁽⁸⁾。ここで、デカルトにとって共通概念あるいは公理は、自明なもの、直観によって知られる単純者であるということに注意しなければならない。（後述する如く、ロックはこの点でデカルトと対立する。）例えば、初期の著作「精神指導の規則」においては、「同一の第三者に等しい二つのものは相互に等しい」等の共通概念が、単純本質 *simplex natura* の内に分類されている⁽⁹⁾、「哲学原理」では、その種の共通概念は単純概念と呼ばれたりする⁽¹⁰⁾。それらの共通概念は無数にあるが、先入見から脱することさえできれば、万人に等しく明証的に知られるものである。ここから、デカルトはこれらの公理をほとんど生得的真理とみなしていたと考えられよう。

以上の考察を踏まえるとき、1630年4月15日付メルセヌ宛書簡に見られる「永遠真理創造説」⁽¹¹⁾は、看過しえない重要な理論であると思われる。

永遠真理創造説には二つの側面がある。数学的真理あるいは永遠真理は、神が自らの自由意志によって創造したものである、という神的側面と、われわれ人間がそれらの真理を知りうるのは、それらが神

によってわれわれの知性に刻印されたもの、すなわちわれわれにとって生得的なものであるからだ、という人間的側面である。(特にこちらの側面を強調したい場合には、「永遠真理生得説」とも呼びうるであろう。)この永遠真理創造説が語られているのは、デカルトが、自然学を形而上学なしには樹立しえなかった、と告白する文脈中であり、従ってその自然学の基礎としての形而上学が、この永遠真理創造説に他ならないと考えられる。

この同じ手紙において、「空虚が存在しないことを証明できると思う」⁽¹²⁾と述べられていることは、非常に興味深い。永遠真理創造説の神的側面に力点を置き、併せてデカルトの数学が、空間的表象と切っても切れぬ座標幾何学であったことを考えれば、神による数学的真理の創造を、純粋数学的空間の実在化ないし実体化と読みかえて、空虚な空間排除への方向に導くこともあながち不可能ではない。ただ、この解釈は、永遠真理創造説と空虚の否定とを直接明快に結びつけるという利点をもつが、いささか短絡的すぎるであろう。それは、本質と存在の間の隔りを一挙に飛びこえること、有限な人間が神の視座に上って神の創造行為を云々することを意味し、仮にデカルトにそのような着想があったとしても、当時、公にしうる代物ではないと思われる。

ところで、デカルトの空虚否定の論拠となったのは、「実体＝属性」シエマであったが、一般に、共通概念乃至公理は、演繹の各段階をつなぐ鎖、いわば推論の推進役を務めるものである⁽¹³⁾。例えば、「第三省察」の神の存在証明や、「第六省察」の物体の存在証明を導くのが、「無からは何も生じえない」「原因は結果と同等もしくはより大きな実在性を持たねばならぬ」等の、デカルトが公理あるいは共通概念と呼ぶものであることは明らかであろう。永遠真理生得説とは、これらの公理が人間の知性に生まれながらに刻印されているという、公理の真理性のアプリオリな正当化に他ならない。

本節の冒頭で確認したように、デカルトの自然学は、形而上学という根から出た幹である。言うまでもなく、デカルト形而上学の最も重要な著作は「省察」である。1630年の手紙に現われる「永遠真理創造説」と「省察」とは一体いかなる関係にあるのであろうか。以下に簡単な考察を試みよう。

「省察」においては、「永遠真理生得説」という類のあからさまな公理の正当化は、少なくとも当初は見られない。実際、欺神の想定による誇張懐疑は、永遠真理の真理性にまで及んでいる。コギト、すなわち思惟するわれの存在は、このような一切を無化する懐疑の嵐のただ中で得られる。しかしながら、公理に対する徹底的な懐疑も、コギトと同時にゆるめられてしまっていると思われる。デカルトの語り口はかなり微妙である。

「私が考えるものであるということ、私は確信している。それならば私は、ある事からについて確信をいただくために必要な条件をもまた、知っているのではあるまいか。ところで、この最初の認識のうちには、私が肯定する事からについての、明晰で判明な認知以外の何ものもない。しかるに、私がこのように明晰に判明に認知する事からが偽である、というようなことが一度でも起こりうるとするなら、もちろんそういう認知は私に真理を確信させるには十分でないことになるであろう。それゆえ、いまや私は、私がきわめて明晰に判明に認知するところのものはすべて真であるということ、一般的な規則として確立することができるように思われる⁽¹⁴⁾。」

意地の悪い見方をすれば、これは公理に裏口を開けたものだと言えらる。その後、デカルトは神の存在証明に向かうが、そこにおいてさまざまな公理が論証を押し進める原動力として重要な役割を果たすことは、先述したとおりである。ともかくデカルトは、公理の助けを借りて、誠実な神の存在を証

明する。ここに至って始めて、永遠真理は全体として誇張懷疑の首枷から解放されることになる。「第四省察」誤謬論の末尾に置かれた明晰判明知の規則、「すべて明晰で判明な知識 perceptio は、疑いもなく実在的なものであり、したがって無に由来するものではありえず、必然的に神を一かの最高に完全なものであって、欺瞞者であることは相容れないところの神を一作者としてもっており、それゆえ、疑いもなく、真なのである⁽¹⁵⁾」は、まさに永遠真理創造説の表明に他ならない。結論的にいえば「省察」は、永遠真理創造説を、神の視座を借りて一気に述べるのではなく、飽くまでも有限な人間の位置にとどまりながら、一つ一つ論証をつみ重ねて継起的に叙述する試みであると言えよう。

そして、その際おそらく循環は不可避なではなからうか。永遠真理創造説とは、数学的真理および公理は、神の意志的創造のゆえに真理たりうる、と主張するものである。それゆえ、それらの真理の絶対確実性は、作者である神に依存するので、人間は誠実な神の存在を知らぬ間は、懷疑から逃れられぬであろう。しかしながら、神の存在を啓示によらず、自然の光によって証明しようとするれば、その論証過程において、何らかの公理や共通概念を確実な真理として前提し、用いざるをえないのではないか。古来、「デカルトの循環」と呼ばれてきた問題について、今ここで十分に検討することはできないが、私には、デカルトや他の論者がいかに弁明しようと、事柄自体がすでに循環を課してしまっている、そのように思われてならない。

ともかく、1630年の永遠真理創造説と「省察」とは、その叙述の形式こそ異なるが、自然学の基礎として意味するところは大きな差はないと思われる。それは自然学の原理が、感覚的経験を越えた数学的真理あるいは自明な公理、共通概念にもとづいて、アプリオリに導出されねばならぬ、ということを教える。

「かくて物体的事物は存在するのである。けれどもおそらく、それら物体的事物のすべては、私が感覚で把握するとおりのものとして存在するのではないであろう。こういう感覚による把握は多くの点できわめて不明瞭であり混乱しているからである。しかし、少なくとも、私がそれらのうちに明晰に判明に理解する事からはすべて、すなわち、一般的にいって、純粋数学の対象のうちに把握される事からはすべて、それらのうちにそのとおりにあるのである。」(第六省察より)⁽¹⁶⁾

空虚の否定は、このような自然学におけるアプリオリズムの一つの特徴的な頭われである。それは、空間あるいは延長に対する不可疑な公理—「実体=属性」シェマーの発動によって瞬時にえられる。

2. ロックのデカルト批判

Omne corpus est extensum et solidum,

Nullum extensum et solidum est pura extensio,

Ergo corpus non est pura extensio.⁽¹⁷⁾

ロックは、デカルトのように物体の本性が延長に尽きるとは考えない。物体を構成する為には延長だけでは不十分で、solidity 充実性⁽¹⁸⁾という性質が不可欠であると考え。従ってロックは、純粋な延長にすぎぬ空間と、solidity を伴う物体とを、まったく別個のものとして区別し、さらに空虚な空間の実在をも認めている⁽¹⁹⁾。しかし、ここではロック自身の空間論に立ち入ることはしない。専ら、前節でみたように空間に対して「実体=属性」シェマを発動することによって空虚を否定したデカルトにむかって、ロックがいかなる批判を加えたか、について考察しようと思う。

「『空間と物体は同じだ』と言ひ張る人たちは次の両刀論法をもちだす。すなわち、この空間は或る

ものか、無か。either this space is something or nothing もし二つの物体の間に無がある(何もない)とすれば、二つの物体は必然的に触れなければならない。また、もし或るものがあると容認するなら、彼らは、それは物体か精神か、と問う。」(Essay. II. ch 13 § 16)⁽²⁰⁾この一節は、デカルトの「哲学原理」の次の箇所を照準にして書かれたものと思われる。

「もし神が、ある容器に含まれている物体をすべて取り除き、あいた場所に他の物体がはいってくるのを許さないとしたら、どういうことになるかと問われるならば、そうなれば容器の側壁は互いに密着してしまふであろう、とこたえるべきである。なんとすれば、二つの物体の間に何も介在しないならば、両者が相互にくっつくことは必然なのであって、両者が離れているながら、いいかえると、両者の間に距離がありながら、しかもその距離が無であるということは、明らかに矛盾しているからである。(Pr. II.18)

デカルトにとって、支えとしての実体なしの延長が、不可疑な真理としての「実体=属性」シエマに対立する矛盾概念であることは、先ほど来、くり返し述べた。ロックは次のように応酬する。

「これに対して、私は別の質問で答える。すなわち、思考できない充実した solid^{もの}存在者 being と延長のない思考する存在者とのほかにはなにもないし、あるはずがないと、その人たちに告げたのはどれか。……(中略)……また、(日ごろたずねられるように)物体を欠くこの空間は、実体が偶有性か、とたずねられれば、私は即座に答えよう。問う者が実体の明晰判明な観念を私に明示するまで、私は知らないし、私の無知を白状して恥じないだろう、と。」(Essay. II. ch 13 §16~17)

これは「実体=属性」シエマの空間に対する適用への明確な拒否宣言と解しうる。このすぐ後の箇所で、ロックは、実体と偶有性は哲学にとってほとんど役に立たない of little use とさえ言明する⁽²¹⁾。このようにロックが、デカルトあるいはデカルト派の提出した「両刀論法」を免れえた背景には、彼の徹底した生得説批判が大きな役割を果たしていると考えられる。特に次の発言は注目し値しよう。

「もし、私たちに生得原理のあることを承服させようとする者が、原理を総体的にまとめて together in gross 取り上げずに、それらの命題を作る部分を別々に separately 考察していたら、おそらく、あれほど急いで原理が生得だとは信じなかつただろう。なぜなら、そうした真理を作り上げる観念が生得でなかったら、その観念から作り上げられる命題が生得であることはできない……(中略)……からである。」(Essay. I. ch 4 §1 傍点は原文イタリック体)

ここから明らかに、ロックにおいては、所謂生得原理あるいは公理が、命題である以上、デカルトが考えたように単純なものではなく、諸観念を構成要素とする複合物とみなされている、ということが知られる。ロックは実体に限らず、いかなる観念であれ、生得観念の存在を認めない。すべて観念は、経験(感覚及び反省)から得られるものである。従って、材料としての観念が生得でない以上、諸観念によって構成される所謂生得原理はなおのこと、認めるわけにはいかない。ロックは同一律や矛盾律さえ、先天的な原理として考えず、公理、公準に関して徹底した経験論の立場を貫こうとする⁽²²⁾。

周知の如く、ロックにとって確実な知識とは、観念間の一致不一致の知覚にある。観念が不判明であるかぎり、その一致不一致の知覚も不明瞭であらざるをえない。われわれ人間が、一般的な「実体」についての明晰判明な観念を持ちえぬことは、ロックが随所で力説するところである。そのような観念は、感覚によっても反省によっても得ることはできない。実体ということばの意味するところは、「何かわからないもの、すなわち、それについて私たちがいかなる特定判明な実定的観念ももたない或るもの」の不確実な想定 an uncertain supposition でしかなく、私たちはそれを、私たちが本当に知って

いる観念の基体 *substratum* ないし支持体 *support* とみなしているのである。」(Essay. I. ch 4 §19)⁽²³⁾

このように考えるロックにとって、「実体=属性」シュマは、不判明な観念から構成された普通命題にすぎず、到底、不可疑な真理として容認できるものではない。従って、ロックにデカルトの証明は通用しないのである。

3. 「実体=属性」シュマとデカルト形而上学

実を言えば、ロックが力説する「実体」の不可知性には、デカルト自身すでに気づいているのである。しかしそれにもかかわらず、「実体=属性」シュマの方は明断判明な真理であって、実体はむしろ属性に対するこの公理の適用の結果知られる、とデカルトは考える。

「しかしながら、実体は、それが存在するものであるというだけでは、ただちに気づかれるわけにはゆかない。ただ存在するというだけではわれわれを触発することがないからである。むしろ、われわれが実体を容易に認めるのは、そのなんらかの属性からであり、無にはなんの属性も、なんの特性または性質もない、という共通概念によってである。すなわち、ある属性が現存している *adesse* と知ることから、われわれは、その属性を帰属させることのできる、ある存在する事物、すなわち実体もまた、必然的に現存しているにちがいないと結論するのである。」(Pr. I. 52)

このような主張は、ロックの側から見れば、何かわからぬもの(=実体)を導出するために何かわからぬもの(=「実体=属性」シュマ)をもってする、という強弁と映るであろう。しかしながら、デカルトには「実体=属性」シュマで固執せざるをえないゆゆしい事情があるように思われる。その第一は、このシュマが、神の存在証明および物体の存在証明の双方において、論証の連鎖の不可欠の環をなしているということである。従って、シュマの放棄は、ただちに形而上学全体の崩壊につながりかねないだろう。更に深読みすれば、「実体=属性」シュマがコギトの時点からすでに始動していると解釈することさえ可能であると思われる。長くなるが「哲学原理」の一節を引こう。

「ところで、なんらかのしかたで疑うことのできるものを、すべてこのように退け、偽であるとさえ考えるならば、神も天空も物体もないと想定することは容易であり、また、われわれ自身が手も足も、さらには身体をももたないと想定することさえ容易である。しかしながら、だからといって、このようなことを考えているわれわれが無であると想定することはできないのである。なぜなら、考えるものが、考えているまさしくそのときに存在しない、と解するのは矛盾しているからである。したがって、「私は考える、ゆえに私はある」という認識は、あらゆる認識のうち、順序正しく哲学する者が会おうところの、最初の最も確実な認識である。」(Pr. I. 7 下線筆者)

下線部は、明らかに、空虚否定の論拠、「無がなんらかの延長をもつことは矛盾する」と同様、「実体=属性」シュマの一つの特殊な形態であり、上記の引用は、このシュマが、デカルト形而上学の第一の真理、コギトの論証にも深く関わっていることを示すように思われる⁽²⁴⁾。勿論、シュマ乃至共通概念単独では、「思惟するわれ」の存在を導出しえないことは言うまでもなく、何よりも重要なのは、疑いという現実の思惟活動およびその思惟活動の意識なのであるが⁽²⁵⁾。一つの可能な解釈として、われの存在の確信と同時に「実体=属性」シュマの確実性も確信された、と考えられるように思われる。

もし以上のような解釈が妥当であり、「実体=属性」シュマが終始一貫してデカルト形而上学の成立

に寄与していたとすれば、空間に対するシェマの適用は、何ら奇異なことではなく、むしろデカルトにとっては自然なことであるとさえ言えるだろう⁽²⁶⁾。

*

以上、デカルトが「生得説」的傾向のゆえに、ほとんど不可避免的に空虚の否定に導かれている、という点について考察してきた。これはやはり、デカルト自然学のアプリオリズムの否定的側面であろう。アプリオリな演繹には独断論の罣が待ちうけている。ロックの反発はもっともである。しかしながら、デカルトにおいて直線上の慣性の法則、運動量保存則などが得られたのは、神の不変性という大前提があればこそであった、ということも見逃してはならない。「生得説」と「経験論」に現代的改変を施した上で対比し、結局「経験論」に軍配を挙げる論者もいるが⁽²⁷⁾、なかなか難しい問題である。

(注)

- (1) 書簡 14 (岩波文庫 林達夫訳 P91)
- (2) Pr. II. 53 (哲学原理 Principia Philosophiae 第二部 53 節 ; 以下同様の仕方で略記)
- (3) 内的場所に関しては、Pr. II.10 参照のこと。われわれが常識的な意味で空間と言う場合の用法に近い。
- (4) 略号は(2)参照のこと。
- (5) 同様の証明は、1648年7月29日付アルノー宛書簡にも見られる。(AT-V p223, Œuvres de Descartes ed. Adam-Tannery 第5巻、以下同様に略記)
- (6) cf. Lettre à Père Noël 1647.10.29. ; Lettre à Le Pailleur 1648.3.
- (7) Pr. II .18
- (8) Pr. I .49,52
- (9) AT-X p419
- (10) Pr. I.10 , cf. ibid.47 , 48 , 49
- (11) AT-I p145
- (12) ibid.p140
- (13) 「それは、他の諸々の単純本質を相互に結合する鎖のようなものであり、われわれが推論によって結論することはすべてその明証性にもとづく」(AT-X p419)
- (14) AT-VII p35
- (15) ibid.p62
- (16) ibid.p80
- (17) An Essay concerning Human Understanding Book IV chapter 17. §8 (以下 Essay. IV. ch17 §8 のように略記)
- (18) solidity に関しては、Essay. II. ch4 参照
- (19) 特に重要な論拠として、空虚が存在しなければ運動が不可能であることを挙げるが、ライブニッツも指摘するように、ロックの論法は、物体が完全な剛体であるという仮定においてのみ有効で

- あろう。cf. Essay. II. ch13 §23 ; Nouveaux Essais ed. Gerhardt V. p138
- (20) 略号は(17) 参照のこと。
- (21) Essay. II. ch13 §19～20 表題
- (22) ただし、ロックは神の存在の論証過程では因果律を普遍的な命題として前提し、使用しているように思われる。注意深く「原因」「結果」という語を避けてはいるが。(cf. Essay. IV. ch10 §3) また、「実体」の観念についても、まったく否定しざるわけではなく、想定せざるをえないという仕方で容認していることを考えれば、空間に対して「実体=属性」シエマを発動させることには明らかに異議を唱えるものの、シエマから完全に離れているとは言えないかもしれない。普遍命題としては認めなくても、見方として染みついているように思われる箇所もある。特に複雑観念としての実体と様態に関する説明には、「実体=属性」シエマの影が濃い。(cf. ibid. II. ch12 §4～6)
- (23) 実体についての詳しい論及は Essay. II. ch23 参照
- (24) 「実体=属性」シエマとコギトとの結びつきは、方法序説第四部においてもうかがわれるように思う。cf. AT-VI p33 また、Pr. I. 10 も参照されたい。そこでは「思惟するものが存在しない」ということを「私は考える、ゆえに私はある」という命題よりも先に知っておかねばならないことを否定しない、と言われている。
- (25) 物体の存在証明において最終的に感覚の証言を必要としたのも、公理あるいは永遠真理だけでは存在についての知は得られないという同様の事情によるものであろう。
- (26) ここでは触れないが、空間の対概念である時間についても、シエマを発動しようとする傾向が見られるように思う。cf. Pr. I. 55, 57
- (27) J. L. Mackie, "Problems from Locke" Oxford 1976

[註 記]

訳文については、「哲学原理」井上庄七、水野和久訳、「省察」井上庄七、森啓訳、(以上中央公論社)「人間知性論」大槻春彦訳(岩波文庫)を参照し、大いに益を受けた。一々断わらなかったが、そのまま借用した場合もあれば、若干の変更を加えた場合もある。ここに謝して記しておく。

[哲学 博士課程 3 回生]

Sur l'espace vide

— d'après Descartes et Locke —

par Kiiko Hiramatsu

Dans le domaine de la physique, il y a un postulat bien connu de Descartes qui limite la notion de “Corps” à une notion d’“Etendue”. Si on inverse l'ordre de cette proposition, cela revient à dire que Descartes nie la possibilité d'existence de l'espace vide. Cette négation est une lacune qui a rendu incompatible son système de la physique avec ses recherches en mathématiques. Nous n'allons cependant pas attarder à une telle critique que nous pouvons faire de nos jours.

Notre propos sera de mettre en évidence dans le cadre de sa métaphysique les raisons pour lesquelles Descartes est obligé de ne pas reconnaître l'existence de l'espace vide. C'est pourquoi nous allons introduire la critique de Descartes par Locke qui défendait la thèse contraire. Il est clair que leur divergence fondamentale se trouve au niveau de leur propre système métaphysique. Notre objectif est de montrer jusqu'à quel point la non reconnaissance ou la reconnaissance de l'espace vide est le reflet du rationalisme et de l'empirisme.

La négation de l'espace vide par Descartes repose sur l'axiome selon lequel le rien ne possède ni qualité ou attribut. C'est pour lui une vérité première, indubitable. Donc la négation de l'espace vide serait en quelque sorte une conséquence de sa métaphysique innéiste. D'emblée, Locke refuse ce principe cartésien puisqu'il n'admet pas l'existence de vérité innée, a priori. Au contraire il construit son système philosophique à partir de l'expérience de la réalité.

The Algebraic Mind

— Epistemology and Methodology of Leibniz —

by Akio Kikai

It is difficult to unify Leibniz's ideas in his various writings into an intergrated whole. It is partly because various parts of his general system (i.e. his metaphysics, logic methodology, etc.) cannot be settled in such an order that one part can be regarded as primordial and the others can be derived from it. Nevertheless his whole thought is by no means an aggregation without unity, but is “la substance qui est douée d'une véritable unité.” We can find one clue to relate these parts in his theory of expression (we follow the terminology of L.E. Loemker) which permeats many branches of his thought. For example, his metaphysical theory about actual universe, i.e. his theory of monade, is based on the idea that the essential function of all individual substance, that is, of all monades, is to express the universe and the God.